



あーすフェスタかながわ2008で開催された「しゃべりば」の様子。

特集

# 外国にルーツを持つ 若者の表現を支える

BOOK 紹介『蒼氓の92年—ブラジル移民の記録』	5
知をめぐる対話シリーズ(6) 北川フラムさん (アートフロントギャラリー代表)	6
あーすぷらざ外国人教育相談が新しくなりました!	9
かながわのキーパーソン 鈴木善樹さん (多言語ラジオ番組インタナショナルナバサ/コーディネーター兼パーソナリティ他)	10
[Event Schedule] 絵本で知る世界の国々〜アジア〜、映画上映会『ツォツィ』他	11
かながわエスニックレストランマップ 2008 他	12



# 特集 外国にルーツを持つ若者の表現を支える

1990年代以降、外国人登録者数は増加の一途をたどってきました。90年代初期に来日した人は既に20年近く日本で暮らしています。その一方で、来日した子どもたちは、サポート体制が整っていない状態にある日本の学校で学び、日本語での学習や進学、人間関係、差別などの壁に直面してきました。小さい頃に来日した人たちの他にも、出稼ぎなどで来日した親から生まれた若者や、在日韓国・朝鮮人や華僑のルーツを持つ若者など、外国にルーツを持つ若者たちは様々な背景を持っています。彼らは生活の基盤が日本にありながらも、外見・国籍・名前ですべてから「外国人」の扱いを受けたり、「外国人」と言われることに違和感を抱きながらも、自分の中に存在するそれぞれのルーツを意識したり、「日本人」か「外国人」と単純に割り切れない自分の存在に複雑な思いを抱えながら、日本の社会で育ってきました。

その若者たちの中に、音楽や映像、演劇などを通して、様々な表現活動を行っている人たちが現れてきました。表現をすることで、自分たちの存在やアイデンティティを見つめ直し、またそれぞれの思いや、様々な背景を持った自分の存在を社会へ向けて発信しています。財団では「かながわ国際協力基金」により、こうした若者たちの自己表現と発信を支え、若者たちのネットワークを広げるため、「マルチカルチャーチルドレンの会」と映像制作の協働事業を行っています。今回は、その事業の協力者であり、これまでも様々なルーツを持つ人たちの表現の場に関わってきた永野絵理世さんとすずきこーたさんのお二人にお話を伺いました。

## “つなげる”という立場



### 永野 絵理世さん (映像制作プロデューサー)

日本映画学校を卒業後、フリーでドキュメンタリー映画の制作にあたる。多文化共生保育を実践する川崎の桜本保育園を追った『ヘンニムの輝き』のプロデューサー。今回の協働事業では、映像制作の専門家として映像作品の取材から編集まで関わる。

した。友だち同士の会話の距離間を映像として撮れました。その自然さが作品の中で生きています。

映像の作り方としては、普段の何気ない会話、日常の部分拾って、それを組み立てて作品にしたという感じです。理沙が日常で何気なく書いた文章や写真など、映画を意識せずに自然に出てきた表現を作品の中で使ったりと、理沙が自分でも気が付かないうちに表現しているものを、私が見つけ、それを映像の中に入れていくという作業をしました。

### 出演者の魅力

自分が思っていた以上の反響があったことに驚きました。出演した人たちに「ありがとう」と言われ、作品の中でつらい経験を話してくれた彼らにそう言われたことは、誰の感想よりもうれしかった。でも、映像の作り方とか編集の良し悪しがどうかではなく、純粋に出演者の話している内容や、みんなが歩んできた道、常に前向きにがんばって生きてきたことが感動を生んだのだと思います。

今回は、出演者の魅力が、直接に観た人に伝わる作品を作ることができました。また、観た人の中に小さな種を置く作品にできたと思います。つまり、観た人が何かを少しずつ考えたり、感じたり

するきっかけを作ることができる作品になったかなと思います。そして、観た人だけではなく、出演したみんなにとっても、彼らのライフヒストリーとして、大切な作品になっていたら嬉しいです。

### 「普段の姿」にある輝き

出演者となる彼らに会った時、みんな明るくて本当に魅力的でした。作品の中では、彼らが経験してきた苦勞以上に、その魅力的な部分が印象に残るようにしたいと考えました。

みんなは理沙（宮ヶ迫ナンシー理沙さん）の友だちだったので、等身大で話してくれて、自然な姿を撮ることができ

### 観る側の視点

ライフヒストリーを作る上で、小さいときからの写真を入れていくことは大事なことでした。日本出身で、日本で育った人が観ると、出演している人がペルー出身といってもなかなか想像がつかない。観る人が“ペルー”を想像できるように、景色が写る写真やペルーの友達と撮った写真などを入れ込みました。観ている人が想像できることが一番大事だと

思います。

つらい体験を話す部分もたくさんあるけれど作品全体が暗くならないように、また、仲間内のためだけの作品にならないように、編集などの技術的な面でサポートしてきました。ナレーションや選ぶ映像によっては、仲間内では笑えても、一般的には理解されなかったり、しつこい印象を与えたりします。いろいろな人に抵抗なく観てもらえるようにシンプルな作りにしました。

## 自分は白でもなく透明

今回、私は“つなげる”という立場を大事にしました。発信する人がいて、受信する人がいて、その過程をつなぐ「電線」を作る役割です。以前、私の仕事は「声の出せない人の声になる仕事」と言われたことがあります。声にならない声や、声に出してもなかなか伝わらない声を「映画」という形でたくさんの人に伝わるようにする。今回もその役割でした。その上で一番大切にしているのが、そのままの声をちゃんと伝えることです。映像作品は、編集によっては全く見方も見

られ方も変わり、作り手の都合のいいように作ることができます。彼らが言おうとしていることを曲げないで、そのまま伝えるようにしました。そこに映像を作るものとしての責任があると思います。

出演者のみんなは個性が豊かで、色に例えるととにかくカラフルで、その色を活かすため、自分は透明になることを心がけました。自分は白でもなく、透明。そして、撮る対象となった人の色そのまま映像に出す。今回のような作品は、作者の意図がどうこうというよりも、カラフルなみんなの色を出す方が適していると思いました。



## 映像の魅力

映像は作る労力がとても大きい分、人に伝わる力も大きいから、作る意味があるし、作り終わった時に達成感があります。そして、映像は対象の動きだけではなく、音や表情、雰囲気、間、表現の仕方などすべてを伝えます。

## ルーツを持っている魅力

映像を撮っている間、出演者のどの人に会っても、友だちになりたいと思いました。自分にないものをみんな持っていました。

私はルーツをしっかりと持っている彼らをうらやましいと感じます。私は日本の中で何回も引越して、ルーツがどこにあるのか分かりません。その私から見たら彼らはみんなとても魅力的です。(談)

## 協働事業による映像の制作

協働事業では、「マルチカルチャーチルドレンの会」の代表の宮ヶ迫ナンシー理沙さんが外国にルーツを持つ若者たちとのネットワークを作り、それぞれの経験から自分たちと同じような境遇にある子どもたちにメッセージを送る映像作品

を制作しました。

作品では、宮ヶ迫さんが外国にルーツを持つ若者たちにインタビューをしていき、日本に来たばかりの時に学校生活で経験したことや、進路や就職のことなど、それぞれのライフストーリーを語り合います。作品に出演している人たちは、中学生の時にブラジルやペルーから来日した若者たちが中心となっています。現在作品は、上映会で出た意見を元に再度編集作業を行っています。



2007.7	<b>事業の立ち上げ 合宿&amp;ワークショップ</b> 外国にルーツを持つ若者たちが江ノ島に集まる。
2007.8~	<b>インタビュー取材</b> 合宿で集まった人たちを中心に宮ヶ迫さんがインタビューをする。
2008.1~	<b>映像編集</b> インタビュー取材のかたわら、編集作業を開始。
2008.5-6	<b>上映会</b> あーすフェスタかながわで初上映。6月にも上映会を開催。表紙の写真はその時の様子。



## 宮ヶ迫ナンシー理沙さん (マルチカルチャーチルドレンの会代表)

ブラジルのリオデジャネイロで生まれ、9歳の時に来日した日系2世。現在は大学を卒業し、教育関係の仕事をしている。外国にルーツを持つ若者のネットワークを広げようと会を立ち上げた。

# 「伝えたい」ということ、そして「受け取る(受けとめる)」ということ



## すずきこーたさん

(俳優・ワークショップファシリテーター)

演劇を用いたワークショップの進行役として、学校や劇場などの様々なところで活躍。日本で生活するペルー出身の人たちとも演劇を創っている。協働事業では、立ち上げのワークショップでの進行を行う。

緒に創っている今でも、文化の違いや考え方の違いに気づくことがあります。その気づきは僕にとってとても大切だし、ペルーの人たちも大切だと思っています。演劇を完成させることそのものよりも、創る過程で話すことや、相手があんなことを考えているんだと相手のことを認識したりすることが、大きな目的の一つなのかなと思っています。

一方で演劇を創るという目的があることも重要です。目的があることで、初めて同じ土俵に立ち意見交換をしながら共に進んでいくことができるのです。外国人の人たちは日本においては弱い立場にあります。そういう立場の弱い人たちの助けなければいけないことは当然だと思いますが、それはともすると自分の方が立場が上と錯覚してしまうことがあります(またそのような人もいます)。演劇のように何かを一緒に創っていくということに関しては、僕もペルーの人たちもすべて同等です。そういう立場になれることで、より良い演劇にしようという共通の思いがあるからこそ、本音で言い合うことができると思います。

### ワークショップは意見を言い合える場

進行役としてワークショップに関わる場合には、誰かの意見だけで進んでいくのではなく、意見交換がされるような場を作っていくということをととても意識し

ています。演劇という形に限らず、写真を撮ったり、地図を作ったり、歌を作ったりすることもワークショップではやりますが、どの場合でも同様です。妥協して意見をまとめることが目的ではなく、たとえ意見が最後まで違っても、そこで自分がどんなことを考えているのかという意見を言い合うことができる場がワークショップだと思っています。

また、言葉で伝わらなくても体の動きで伝えることもあるので、体を動かしながら考えることをワークショップに取り入れています。

### 何を伝えたいのか

多くの方は「演劇」＝「表現する」と最初に考えることが多いように思います。でも、何かをやっている人がいて、それを観ている人がいて、その間の関係性のことを演劇と言うと僕は思います。表現することも大切ですが、それをどう受け取るのかということも同じくらい大切です。だからこそ演劇で重視されるべきことは「表現する」ということではなく、「伝えたい」ということ、そして「受け取る(受けとめる)」ということなのです。

以前ある小学校で環境問題をテーマに調べ学習をして、その発表を演劇で行うという活動をしたことがありました。一つのグループが「捨て犬(ペット)」をテーマに選び、そのメンバーの一人に、全く

### 日本に暮らす外国人との演劇

東京都大田区に通称「ペルー人教会」と呼ばれるキリスト教会があります。教会に通うペルー出身の一人と他の場所での出会い、一緒に演劇を始めました。彼から仲間を紹介したいと言われ僕も教会に遊びに行った事がきっかけで、教会に集うペルーやラテンの人と一緒に演劇をはじめ、演劇グループ「Cerro Huachipa (セロ・ウアチパ)」が結成されました。メンバーの多くは外国人の労働組合の人たちで、労働問題とか不当解雇、いじめなどをテーマに演劇を作っています。

セロ・ウアチパは、僕が外国人の人たちと演劇をやる始まりであり、今も続いているメインの活動でもあります。そのつながり、南米出身の住民が多い静岡県浜松市のペルー人学校などと呼ばれてワークショップをやったり、多文化共生を考える集まり(学校や先生向けの講座)などで演劇をするようになりました。

### 演劇を創る過程でのコミュニケーション

仲間のペルーの人たちと数年演劇を一

## 『歌で表すうちの思い』 2008年度国際人材育成指導者養成講座

6月7日(土)にあーすぶらぎで、外国にルーツを持つ若者たちを集めて、すずきこーたさんを講師に歌を作るワークショップを行いました。神戸や神奈川でヒップホップを通じた表現活動を行うアーティストたちや学習支援に関わる学生など様々な活動をしている人

たち約30名が集まり、体を使ったゲームや詩を作ることを通して、自分たちの思いを表現しました。最後はグループごとに作った歌を発表し、それぞれが感想を話し合いました。



セリフのない犬の役を全うした男の子がいました。親が観たら「セリフのない役なんて…」と思うかもしれませんが、彼にしてみれば当然のことでした。つまり「演劇を創っている」ということ以上でもそれ以下でもなかったのです。自分がいるからこそ自分たちで作った演劇で言いたいことが伝わる、ということを知っていたわけですから。単に表現するということではなく（言い換えれば台本に書いてあるからとか、先生に言われたから、といってセリフを発したり体を動かしているのではなく）、演劇を創るという行為をしていました。

演劇を創ろうと言う人は誰も、動機というか、自分がこの作品を作っているという思いを自発的に持つことが大切だと思います。

## 演劇という関係性

演劇は「演じている人・創っている人」だけで完結するものではなく、つまり発信する人と受け取る人という一方通行の芸術ではなく、受け取った人がどう感じたかをフィードバックしてもらい、さらに良い演劇を観ている人と一緒に創っていく、そういった力を持っていると思います。例えば演劇が終わった後に「どう思いましたか？」とすぐに感想を聞く、そういったことで次に更に良いものを創っていくわけです。自分たちも伝えたいことをやるけれども、それに100%

賛同してくれるわけではない場合もあるでしょう。演劇を観て「違うんじゃない？」という意見がでたり賛成する意見が出たり、そこで交互のやり取りがあります。演じている人と観ている人というだけでなく、観ている人同士でも意見のやり取りがあっている。そういうものも全部ひっくるめて、その関係性が演劇だと思います。



## プロでない人たちの演劇のパワー

普段、演劇をやっていない人たちが演劇をやる時、パワーを感じることがあります。うまいとか下手とかではなく、ストレートにやるからこそ観ている人の心に直接響いてくるのです。

セロ・ウアチパが路上演劇祭で上演した時、移民の問題を取り上げた作品をやった後に、観ていた人に「当事者がやっているから心に響く」と言われたことがあります。当事者がやった方が演劇に力があると思うし、面白いこともあります。日本語もうまくないかもしれないけど、だからこそ伝わることもあると思います。

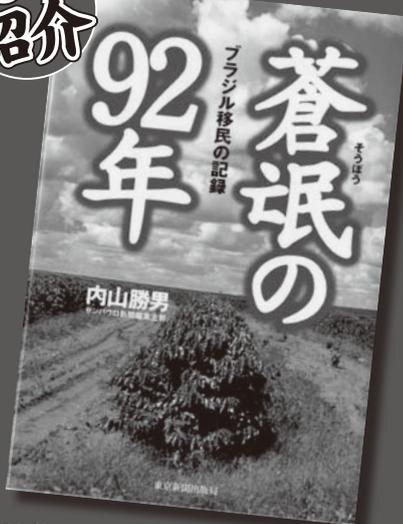
## 演劇から学ぶ

仲間と「演劇デザインギルド」という団体を立ち上げた時、共通認識として「演

劇は人々があらたな認識を獲得するための道具です。楽しみながら、おもしろがりながら、からだを動かし、頭を働かせて、現実や自分たち自身を見直して、そこで発見されたことを表現して他の人に伝えます」という説明文を考えました。自分たちの日常や、本当はおかしいと感じていいはずの「常識」について演劇でやってみると、客観的に見えたり、より明確に表れたりして様々な偏見を取り除いていく手段になります。しかもそれを真面目に考えるだけでなく、楽しくできたら素晴らしいじゃないですか。

ここでは言い切れない力を演劇は持っています。演劇を必要としている人たちに届けたいと強く思っています。(談)

BOOK  
紹介



そうぼう  
『蒼氓の92年—ブラジル移民の記録』  
内山勝男・著／東京新聞出版局／2001

## 2008年は日本人のブラジル移住100周年

～あーすぶらざ・映像ライブラリーの新着図書を紹介します～

1908年、781人の移民を乗せた『笠戸丸』は、神戸港からブラジル・サンパウロを目指して初出港した。それから100年の間に日本からブラジルへ移住した人々の数は、およそ25万人。今日のブラジルの日系人口は約130万人と、海外の日系社会の中で最も多い。

しかし、その移民から始まる日系社会の辿った道を、送り出した日本社会はどれほど知っているのだろうか。「日本移民の“流れの譜”」を知りたいと思い、この本を手にとった。

戦前にブラジルに渡り、ジャーナリ

ストとして活躍してきた著者は、「踊る地平線ブラジル—その中で生きる日系社会、あのこと、この人、踊る群像にスポットを当ててみた」と述べる。ブラジルへの移民第1号として海を渡った人々の期待と現実。厳しい環境の中にも、ブラジルの地での生活基盤を築き上げてきた人々。戦後の日系社会の混乱など。その中にあった様々な出来事や一人ひとりの喜びや悲しみを綴りながら、著者は、世代の変わりつつある日系社会のこれからの注目をしている。

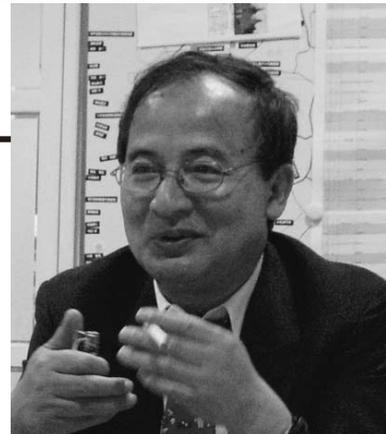
# 知をめぐると対話シリーズ(6)

当財団の学術・文化交流事業に関わってくださった方々とのインタビューを紹介します。

## 市民生活とつながるアートを

### 北川フラムさん (アートフロントギャラリー代表)

湘南国際村学術研究センターが開催している「21世紀ミュージアムサミット」(※1)や「21世紀かながわ円卓会議」(※2)にご参加いただいている北川フラムさんのインタビューをお届けします。越後妻有トリエンナーレをはじめとするさまざまなアートイベントを企画し、ジャンルを越えて活躍する北川さんに、アートに対する思い、アートイベントを通して得られたものなどについてお聞きしました。



※1 日本経済新聞社との共催で、国内外の主要美術館長が21世紀のミュージアムの課題と展望について討議する国際会議。第3回目である今回、第1部は、2008年3月21、22日の2日間にわたり、「新たな美術館像を求めて」をテーマに、湘南国際村センターで開催されました。詳細は、<http://www.k-i-a.or.jp/museum/>。

※2 社会構造や政治経済システムの変容、価値の崩壊など国際社会の話題に着目し、研究者・有識者が一堂に会して議論を展開します。今年度は、神野直彦さん(東京大学大学院教授)がモデレーターを務め、来年3月20、21日に開催予定です。

### アートと社会を結びつける「裏方」に

北川さんが最初に「アート」に関心を持たれたきっかけは？

21歳になるまで、美術に携わるとはまったく考えていませんでした。小学生の頃は、姉が絵を描いていたので、そのそばで遊んだりしていたことはありましたが、美術の時間はとにかくさぼれるし遊べるし、とっていて、実際に成績も5段階で2や3というひどいものでした(笑)。

僕の学生時代は、学生運動の真最中でしたから、とにかく何か社会活動をしなればと思い、東京に出てきて、自ら運動に参加していろいろやっていました。その当時、東京国立近代美術館で、村上華岳(1888-1939、日本画家)による京都市立美術工芸学校(現京都芸術大学) 修士修了作品「2月の頃」という絵と、西洋美術館で見たボナール(1867-1947、フランスの画家)の油絵の2枚が直接のきっかけとなって、とにかく絵を描きたいと思い、東京芸術大学に入りました。学生運動をやっていた一方で、自分が本当に好きなことをやりたいと思ったのです。

芸大では、一生懸命、絵を描いていましたが、ある時、好きな日本のアーティストの作品が、晩年になると面白くなっていることに気づき、それは、日本社会の問題ではないのかと考えました。つまり、美術が美術の中で成立しているということはありません。アートをもっと広い共同体の中で捉えていく必要性を感じたのです。美術という小さな村の中で考えているばかりで、内向きであり非常に良くない。

この問題は、運動を通して関わってきた、社会問題と同じ構造だと気づきました。共同体の喪失、縦割り社会といった日本社会の問題点が美術にも全部あり、縦割りで仮想的な制度の中で美術が成立していて、実際の市民生活とつながっていないことが問題だと思ったのです。それで、美術の問題は結局、社会問題だと

思い、それなら裏方になって美術と社会をつないでいこうと。それが今の活動につながる最初の出発でした。

アートは「宛名の無いラブレター」のようなものですから、語るべき対象やそれに対する愛情がないといけない。しかし、日本のアーティストは、日本社会の中で自分が根ざしている場所がなくてダメになっていると感じ、絵を描いている場合ではないと思いました。それまで、東京に行かないとまずい、あるいは大学に行かないとまずいのではないかという思いから、なりゆきでいろいろとやってきていましたが、でも美術をやろう、そしてその裏方をやろうと思ってからは、ぶれていません。

日本は西洋化を目指し、美術館を作り、そこに展示できるものを「美術」としてしまっただけで、市民にとって本当に楽しみであった、祭りや大道芸、茶の間や食べ物といったものを、美術から全部切り捨ててしまった。その反動が、ここ数年、話題となっているフランスのナント市に代表されるような「Creative City(創造都市)」につながります。フランスには管理され、展示される「美術」のためのルーブル美術館もありますが、それだけでなく、ナント市のように生活、身体、五感にかかわった「美術」をつくりだしています。40年くらい前、日本社会での美術をめぐる状況を見ていて、ちょうど創造都市と同じような社会の必要性を感じていました。

### ファンとともに生きるアート

具体的にはどのようなアートの活動をされてきたのでしょうか？

初めて自分でやろうと思った「裏方」のきっかけは、山下洋輔(1942-、ジャズピアニスト)です。山下洋輔を初めて聴いたとき、こういうのを自分が中学や高校で聴いていたらもっと違ったのに、と思いました。それで、彼のライブを新潟で開催しました。

それから、版画を売りました。例えば、ある小説家を好きだと思えば、その小説家の本を買いますよね。それで、「この小説の頃は面白かった」とか、出版の時期に沿って、好みを話し合ったりしますよね。僕よりもう少し上の世代の人たちは、まさに芸術といえば文学であり、文学には同時代性がありました。しかし、日本の場合は、美術に関していえば同時代性はまったくありません。一般的な見方として、どのアーティストの作品も、全部同じ「美術」として、本の中にあるもの、展示会場にあるものと思われています。アーティストとそのファンがともに同時代を生きているという、いわば共犯関係のようなものがないのです。小説と小説家が、そのファンとともにあるのと同じように、美術作品とアーティストも、ファンとともに生きるものなのです。

なぜ版画かといえば、絵は偉い人だと高い。でも小説は偉い小説家だから高価だというわけではありません。それと同じように、版画であればそれほど高くはなく売り易いのです。今も版画を売る活動は続けていますが、小説と同じで、ファンがいることで、アーティストもやはり鍛えられるわけですね。

## アートイベントによって 結ばれる地域とのつながり

日本で当時、異端で奇想の建築家と見られていたガウディを伝えたいと思い、「アントニオ・ガウディ展」(1978 - 79)を開催し、全国を巡回しました。他には、ボランティアで、版画を小学校に巡回させて、子どもたちに直に観てもらう「子どものための版画展」(1980 - 82)です。

それから、「アパルトヘイト否! 国際美術展」(1988 - 90)。「アパルトヘイトに反対だけど、自分は自分の絵を出すしかない」というアーティストの思いを伝えることができた、とても良質の展覧会でした。ユネスコがやっていて、それを日本でやりたいということで、190ヶ所以上で開催しました。

小さい頃の経験から、絵を見るためには、展示会に行ってお金を払わなければいけないと思っており、そのことが美術と社会をつなげることになるとも考えています。いまだに僕は切符売りをやっていますが、文化は身銭を出して支えることで、生活や社会に身近にかかわってくるんですね。

アパルトヘイト展のときは、富山に3日間ずつ3回行って、開催を説得しました。労働福祉会館のような場所を借りて、電話で呼びかけをして、説明会への参加者を待つのですが、ずっと誰も来なくて。3回目の滞在の最終日ようやく5、6人来てくれました。そのとき僕は「とにかく富山でやります。そのとき手伝ってください」とお願いしました。そうしたら10日後くらいにその参加者から電話がかかってきて、「あままで言われたら自分たちもやらざるを得ない」と。結果、富山展はすごかったです。一つの市が手を挙げ、別の市にも声をかけてくれて、沢山の人が集まっ

て、すごい展覧会になりました。国会でも開催しました。国会議員の先生100人くらいに発起人になってもらいました。それぞれ1万円ずつ払ってもらい、1枚1000円の切符10枚を売ってくださいと。

それから、米軍基地跡の「ファーレ立川」(1994)のコンペで我々アートフロントギャラリーが選ばれました。109点のパブリックアートを使ったプロジェクトです。都市の中で、車止めなどの都市の機能をアート化していくもので、外国の都市計画学会でいまだに「ファーレ立川」は、モデルになっています。コンペがあったのは92年ですが、89年にベルリンの壁、91年にソビエト連邦がそれぞれ崩壊して、多様な世界が同時に存在することが明らかになりました。そこで、「世界がかくも多様」であることを映しこもうということで、36ヶ国92人のアーティストに参加を要請しました。立川という街を、親しみのある街と思ってもらいたくて、できあがる前からツアーを実施し、訪れる人を案内してきました。そのツアーが今も引き継がれて、地元の方たちがボランティアでやってくださっている。立川は今でも、新しい企業やビルができるとパブリックアートを入れるなどしており、街全体が美術館を目指す画期的な街です。

## アートは手間ひまのかかる「赤ん坊」 ～越後妻有の活動から

### それが越後妻有での「大地の芸術祭」 につながったのですか？

その延長ですね。パブリックアートを使って過疎地をどう活性化していくかという取組みが、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(2000-)の活動です。「アートはいわば人類の友達」と捉え、過疎地の越後妻有で、アートには何かできるはずという使命感のようなものを抱いて、スタートしました。結果、アートの働きによって過疎地が生き返りました。

「アートでまちづくり」と言ったら、当初は6市町村約100人の議員の方たちは全員反対ですね。アートでまちづくりなんてできるわけがないだろうと。現代美術だし、反対されるわけですね。しかしその中で、アーティスト自身が「里山でやりたい」となった。アーティストが里山に対する思いを抱き、現地の人にインタビューしたり、地域を知っていく中で、「棚田を使った作品を作りたい」と。そこまでくると、先方も「じゃ50日間だったらいいですよ」となるのです。最初に「場の発見」、次に「やり出す」ことでした。

作品づくりにあたって面白いのは、都会から来た学生は初めは手伝うにしても右往左往していますが、お百姓さんのおじいちゃん、おばあちゃんは自分の土地ということもあり、もっと体を動かしています。お百姓さんたちが手伝い始めることで、その人たちを手本にして、学生たちは動き、そこに共同意識が生まれてきます。その瞬間に地域の人たちにとって作品が自分のものになるんです。お客さんが見に来て、褒めてく



### ▶ 一問一答

座右の銘は？……座右の銘は無いけど、「遊び」が重要だと思っている。子どもは特に、遊ぶことが大事。

愛読書は？……乱読です(笑)。最近読んだ本では、大岡信さんの『日本の詩歌』。改めて読んでみて、すごく勉強になりました。

好きな映画は？……「バベットの晩餐会」「2001年 宇宙の旅」

行きたい場所は？…「ギニア高地」。滝が2000mくらい流れていて、隔離されているから、ガラパゴスみたいになっている。ただ実際僕は、自分の今居る場所で良いといつも思っているんです。



れたりすると、学生やお百姓さんたちも皆すごく嬉しくなり説明もします。越後妻有は本当にお年寄りが元気でですね。来た人がみんな口コミでそれを言ってくれて、それが何十万人という人と呼んだと思いますね。

それに、里山とのつながりです。作品が、道祖神のような目印となって、それを訪ねて人が来る。人間は1500年前から稲作をやっていたわけですから、里山と人間とのつながりはずっとあるはずで、五感に訴えてきます。普通、美術館に行って、作品を200点も見れば、もういやでしょ。でも越後妻有では、歩いて、体を動かし作品を見ることによって、いろんなことを感じるのです。

トリエンナーレ3回目となる2006年から、アートは赤ん坊みたいだと思いはじめました。いたら可愛いし嬉しいけれど、面倒で、手が掛かる。でも、おじいちゃんやおばあちゃんが来て、「まあ赤ん坊ってそういうもんだから、手伝ってやるよ」と。越後妻有で、アートはそういう働きをしたと思いますね。なくてはならない大切な存在で、面白いけど、手間ひまがかかる。

## 人をつなぐアート／アートをつなぐ人

越後妻有では、はじめは若い人たちが多く手伝ってくれていましたが、2004年の中越地震後、大人で手伝ってくれる人が増えました。大人たちが皆自分の居場所を探している。つまり自分がかかわれる場所、自分のリアリティを感じられる場所を探している。これは本当に大きな底流ですね。

そして越後妻有にとっては、他者が来て何かやることを受け入れた、ということが大きいですね。過疎地であり世界一の豪雪地帯でもあります。そこで他者が受け入れてもらえるようになるのに10年かかりました。妻有はその喜びを感じられるようになり、他者は自分のリアリティのある場所を見つけることができたのです。皆さん非常に熱心ですよ。会社の社長とか役人とか、そういう人たちが来て、自分の会社のことより一生懸命にやっているようにさえ見えます。これは、都市が崩壊しつつあるという世界中で見られる問題と通じるものがあります。

その媒介の役割をアートが担っています。作品は公募していますが、ありがたいことに、世界のトップアーティストが妻有に来てくれています。お金の問題ではないんです。自分たちもこういうことにかかわりたいと思ってきている。妻有に来て作品のスタイルが変わった人もいます。フランスやオランダ、オーストラリアでは、ベニスのヴェネチアと並んで、国をあげて、越後妻有のトリエンナーレを支えてくれています。21世紀型の新しい美術の土俵のひとつじゃないかということで、外国がすごく手伝ってくれているんですね。

### まさに「共同体」の実現ですね。

一般市民と、アーティストとの交流が、いたるとこ

ろで起きています。1500年ものあいだ、農業をやってきた集落や風景を、アーティストはそのまま作品の風景として使えるのです。地元の人が所有する土地を、使えるようになったことがすごい。反対されてもやめられないくらいの力はやはりアートにはあったし、アーティストの力もありました。アートも、棚田(農業)も、人間の本能のようなものです。都市はやはり、身体や五感からは離れたところにあると思います。

でも、そのアートをつないでいるのは「人」です。赤ん坊と同じで、アート自身は弱い存在だけど、面白いものでもあります。お金を生むような直接的な効果はありませんが、アートには「多様な入射角」があり、「こうでなければいけない」ということはありません。皆、面白い見方をしていますよ。同時に妻有では、アートの質をキープしているからこそ、これだけ沢山の人が来てくれていると思います。

### 30年後の越後妻有の構想は？

「考える場所」としての越後妻有を展望しています。「良寛」がひとつの例になりますね。良寛の庵にこもって春を待つ心、人恋しきみたいなものは、彼の哲学につながっています。妻有も、自然の厳しい中で、ものを考える場所になり得るのです。実際に、大学が新入生宿舎で使うとか、高校のキャンプとか、キッズキャンプもやっています。アートトリエンナーレを、夏だけでなく冬もやりましょうという意見もあります。

今後の活動も、国などの大きなレベル・枠組みよりは、今居る場所で、自分の足場があるところでやっていくことが着実だと考えています。実際に活動していく中で試行錯誤することが大切だと思っています。

だから、自分とできるだけ違う他者とつながった方が面白い。それは言い換えると「他者の声を聴く」「死者の声を聴く」ということではないでしょうか。

### ▶ インタビューを終えて

ご多忙の中、早くインタビューに応じてくださった北川フラムさん。アートへの情熱と使命感、そして活動を通して常に「人」を大切にしていらっしゃる姿勢が伝わってくるお話が印象的でした。ナンセンが極地探検をした船「フラム号」にちなんで、お父様がつけられたというお名前は、「前進」という意味のノルウェー語の言葉だそうです。名は体を表すと言いますが、まさに、社会とアートとをつなぐパイオニアとして邁進されてきた、フラムさんご自身そのものと感じました。

(インタビュアー：江藤祐子)



### ▶ プロフィール

北川フラム (きたがわ ふらむ)  
1946年、新潟県高田市(現・上越市)に生まれる。1974年、東京芸術大学卒業(仏教彫刻史)。アートディレクター、メディアエーター。アートフロントギャラリー代表。美術、建築、デザイン、音楽、出版などすべての領域やジャンルを越えて様々な展覧会・イベント・活動・まちづくり(最近のものとして、大阪アートカレイドスコープ2007、第3回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006)などに携わる。

### ▶ 参考 HP

アートフロントギャラリー  
<http://www.artfront.co.jp/>  
大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ  
<http://www.echigo-tsumari.jp/>

### ▶ 関連図書

—「もっと知りたい、勉強したい」という方に  
北川フラム【最近の著作から】  
『つながる日本海—新しい環日本海文明圏を築くために』  
武藤誠・北川フラム編 現代企画室、2007年  
『逸格の系譜—愚の行方』  
北川フラム編 現代企画室、2007年  
『希望の美術・協働の夢 北川フラムの40年 1965-2004』  
北川フラム著 角川書店、2005年  
『いま、そこにいる良寛』  
北川フラム編 現代企画室、2004年  
『ART UNIVERSIADE—菜の花里美発見展記録集』  
菜の花里美発見展実行推進委員会編  
北川フラム監修、現代企画室、2003年





# あーすぷらざ外国人教育相談 が新しくなりました!

新しいスタッフを迎え、次のような相談日、電話番号で相談を行っています。「日本の学校のしくみがわからない」「学校で使える多言語の資料はないか?」など、気軽に相談してください。相談は無料です。秘密は守ります。ご本人や保護者の方だけでなく、学校や支援者の方からの相談・問合せも歓迎です。



外国人相談者の言語圏出身の相談サポーターと日本人の相談コーディネーターが協力しながら、相談対応を行っています。

## ●新しい相談日と対応言語

木曜日：中国語、日本語  
金曜日：スペイン語、日本語  
日曜日：タガログ語、日本語

## ●相談時間

14:00 ~ 17:00 (16:30 受付終了)

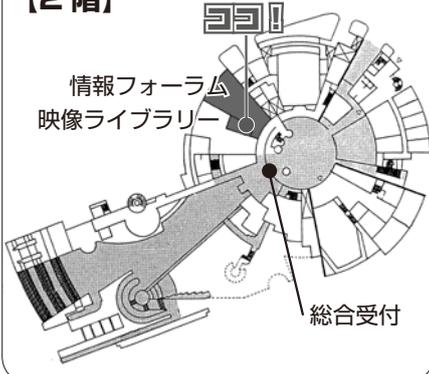
## ●場所 & 連絡先

あーすぷらざ 2階・情報フォーラム  
相談用電話  
045-896-2972 (中国語/スペイン語/タガログ語)  
045-896-2970 (日本語)  
FAX 045-896-2894  
E-mail edu2@k-i-a.or.jp  
※ FAX と Eメールの返信にはお時間をいただくことがあります。

## ●詳細

<http://www.k-i-a.or.jp/plaza/shisetsu/forum/soudan/>  
※ホームページから中国語、スペイン語、タガログ語のチラシもダウンロードできます。

## 地球市民かながわプラザ [2階]



## 相談サポーター

外国人学習者や保護者の言語で相談にのります。各言語圏の教育環境や文化に関する知識を活かしながら、コーディネーターとともに相談者の問題解決のお手伝いをします。

### ●中国語 (木曜日)



#### 李原翔 (りげんしょう)

日本語の勉強をはじめ、子育て、日本の文化・地域社会・教育事情への接触、すべて来日後初めて体験したこと。沢山の人の支えられ、助けられ、多くの困難を乗り越えることができました。自分の経験を生かして、人びとの役に立てれば嬉しい限りです。



#### 周惠雪 (しゅうけいせつ)

こんにちは。16年前に台湾から来ました。家族は夫と中三の息子です。今、家族3人で横浜市に住んでいます。母語を人の役に立てることができれば嬉しいです。

### ●スペイン語 (金曜日)



#### OKAMOTO Elena (岡本エレナ)

メキシコ出身です。日本に来て21年になります。夫と大学1年の息子と高校2年の娘がいます。初めての経験ですが、みなさんのお役に立てるよう、一生懸命頑張りたいと思います。



#### ICHIKAWA Yovani (市川ジョバンニ)

はじめまして!ペルーから来ました。日本に17年も住んでいます。日本人の主人と娘二人と藤沢に住んでいます。役立つことがあれば、ぜひ気楽におたずね下さい。

### ●タガログ語 (日曜日)



#### MIYAJIMA Janet (宮嶋ジャネット)

相談サポーターとしてもう1年半になりました。サポーターを初め、今は色々な活動をしています。日本で困っているフィリピン出身の方々に助けるのが好きです。



#### KAKIZAWA Sandra (柿澤サンドラ)

1994年に日本に来ました。息子がいます。いろいろな事を学びながら経験しました。これからもいろいろと楽しいことや、辛い経験があると思いますが、がんばります。

## 相談コーディネーター

相談内容により、教育委員会、学校、NGO、ボランティアグループなどと調整を行い、サポーターとともに相談者の問題解決のお手伝いをします。



#### 加藤佳代 (かとう かほ)

コーディネーターになって3年目になりました。横浜生まれで、多言語・多文化社会のあり方、情報の流れ方、情報拠点としての図書館の可能性に関心があります。あーすぷらざには、「学び」に関する情報がたくさんあります。ぜひ活用してください!



#### 山野上麻衣 (やまのうえ まい)

はじめまして。3月までは静岡県浜松市で、おもにブラジル人を対象に、外国につながる子どもや家族への総合的な就学サポートや通訳の仕事をしてきました。これから神奈川県でたくさんの方にお会いできるのを楽しみにしています!

## 「多文化子ども支援コーナー」もご利用ください

多文化子ども支援コーナー (あーすぷらざ 2階情報フォーラム内)

<http://www.k-i-a.or.jp/plaza/shisetsu/forum/t-kodomo/>

日本の学校生活を説明する翻訳資料、学校通知文翻訳集、教科学習の翻訳教材、進学ガイドブックなどの教材資料を集めています。ホームページには、教材資料のリンク集を掲載。

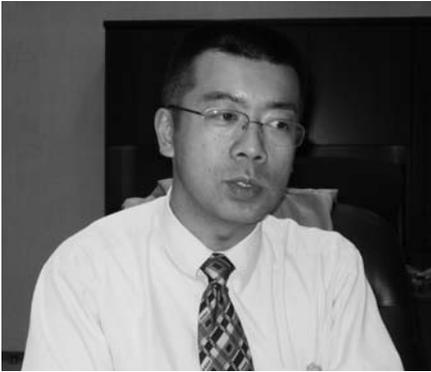




## かながわのキーパーソン

多言語ラジオ番組インタナショナルナパサ／コーディネーター兼パーソナリティ他

鈴木善樹さん



すずき・よしき

平塚市周辺に暮らす外国人向けに、行政や地域イベント等の情報をFMラジオを使い多言語で発信。様々な国籍の人々と広くつながりを持ち、「まちづくり」を意識した在住外国人支援に関わる。社会福祉士の資格を持ち、勤務先の病院ではスペイン語等の通訳もするなど多彩な顔を持つ。

幼いころ相模原市の「ハウス（米軍関係者の住宅）」の裏手の家に住み「フェンスの中の人とわけもわからず会話していた」と鈴木さん。キリスト教系の学校では、礼拝の時間に、貧しい国々を支援する人の記録映像を観た。その記憶は鮮烈に残っている。高校生のときから、スペイン語を学び、知的障害者の支援施設等でボランティア活動をしたり、山谷(\*)で炊き出しなど

### 地域の情報を発信し、コーディネーターとしてまちづくり

に参加した。社会福祉の分野で働きたいという気持ちはこのころ固まった。

就職後、平塚市の派遣で米国カンザス州立大学に1年留学し、「社会で実現したいことを目指して行動すること」を学んだ。多くの人がいりいろな形で社会福祉活動に参加することができるが、社会福祉に資金や人材が集まるように制度を変えることができる人は限られている、その1人でありたい、米国留学を通して思いを強くした。

現在、「インタナショナルナパサ」というFM湘南ナパサのラジオ番組でコーディネーター兼パーソナリティをつとめ、地域情報を多言語で発信している。日本語を母語としない人々に少しでも役立つ情報を伝え、ラジオから流れる声の人々の心の支えになればと願っているからだ。

カンボジア人コミュニティ支援にも関わり、イベントや、カンボジア料理店「アプサラ（平塚市・横内団地）」の立ち上げ等を手伝った。「アプサラ」はカンボジア人の交流の場として人気だそうだ。開店にあたっては、(財)神奈川中小企業センター

のチャレンジショップ事業を活用し、鈴木さんは深夜まで資料作成を手伝った。

他にも、この1、2週間は昼間の仕事の後、南米の人たちの県営住宅への申込みの書類作成も手伝うなど、忙しくしている。

今後は、多くの外国籍住民が生活しやすい環境を作るため、彼らの中にリーダーを見つけ、活動を手伝うことができると考えている。「日本の社会って異質なものを排除する傾向があると思うので、『みんなちがって、みんないい。』（金子みすず「私と小鳥と鈴と」）ということを外国籍住民の立場から言える社会にしたいと思います。日本語教育能力検定試験も受けたい。以前関わっていた日本語教室もそれがないと続けられないかなと思い参加していないので…。ラジオ番組は、外国籍住民自身がパーソナリティとして活躍できるようにしたいですね」と最後に語った。

(\*)多くの日雇い労働者が暮らしている東京都台東区の地域のこと、現在の住居表示からは消えている。

# KIF Report

## 財団が行う様々な事業を報告します

5月17～18日 ㊟-㊟ ㊵㊶㊷

### あーすフェスタかながわ

世界の料理を販売する屋台やダンス、民族音楽、意見交換会などのフォーラムが行われ、約24,000名が来場しました。

その他、下記の事業が行われました。詳しく知りたい方はお問い合わせください。

- 4/19 (土) ～ 29 (火) …アフリカ・あふりか・AFRICA  
～子どもたちは今～ (㊟-㊟ ㊵㊶㊷)
- 4/29 (火) …ファンタジープログラム  
おやこでいっしょにあそぼう (㊟-㊟ ㊵㊶㊷)
- 5/ 6 (火) …カンボジアふるさとコンサート (㊟-㊟ ㊵㊶㊷)

5/25 (日)

…ワールドカルチャー・デー  
～カンボジア～  
(㊟-㊟ ㊵㊶㊷)

6/8 (日)・6/15 (日)

…ワールドカルチャー・デー  
～ヨーロッパ～  
(㊟-㊟ ㊵㊶㊷)



# Event Schedule

このほかのイベントの情報をご希望の方はメールマガジンをご購読ください。  
http://www.k-i-a.or.jp/mail-maga/

イベント すけじゅーる

7月12日 (土)

民族楽器のワークショップ

## 「韓国・朝鮮の太鼓チャンゴを たのしもう！」

「チャンゴ」は韓国・朝鮮に古くから伝わる打楽器です。たたき方とリズムを教わりながら、韓国・朝鮮の文化にふれてみませんか。楽器が初めてでも大丈夫。みんなでココロをあわせて楽しく演奏しましょう。

- 講師：金春江 (キン チュンガン) さん、  
李淑子 (リ スックチャ) さん
- 日時：7月12日 (土) 13:30~15:00
- 場所：あーさ 355 5階 こどもの国際理解展示室
- 対象：こども・一般  
(小学生以上。親子での参加も歓迎！)
- 定員：20名 (事前申込み制・先着順)
- 参加費：無料 (ただし常設展示室観覧料が必要)
- 申込み・問合せ：学習サービス課 (担当：ふじよし)  
TEL：045-896-2899 (祝日除く月曜休み)  
FAX：045-896-2299  
E-mail：gakushu@k-i-a.or.jp

7月19日 (土) ~24日 (木)

## 絵本で知る世界の国々~アジア~

今年で9回目を迎える「絵本で知る世界の国々」。今回はアジアで出版、日本語訳された絵本等をご紹介します。絵本を通して、アジアの国々をより身近に感じてみませんか？期間中は毎日、「ブックトーク」2回と、「おはなし会 (絵本の読み聞かせ・ストーリーテリング)」を1回開催します。(協力団体：かながわこどもひろば)

- 日時：7月19日 (土) ~24日 (木)
- 展示時間：10:00~16:00
- ブックトーク：11:00~/14:00~  
対象：小学校3年生~大人
- おはなし会 (絵本の読み聞かせ)：13:00~  
対象：3歳~大人 \*各回30分
- 場所：あーさ 355 1階 ワークショップルーム
- 参加費：無料
- 問合せ：学習サービス課 (担当：あまぬま)  
TEL：045-896-2899 (祝日除く月曜休み)  
FAX：045-896-2299  
E-mail：gakushu@k-i-a.or.jp

8月2日 (土)

第1回 映画上映会

## 「ツォツィ」

(製作：イギリス・南アフリカ、95分カラー、配給：日活、監督・脚本：ギャヴィン・フッド、原作：アソル・フガード)

映画の舞台は、南アフリカのヨハネスブルク。「ツォツィ=不良」と呼ばれる少年が、奪った車の中に生後間もない子どもを見つける。アパルトヘイト (人種隔離政策) の爪痕が残る中、仲間と窃盗やカージャックを繰り返してきたツォツィだったが、この小さな生命との出会いが、生きることの意味を再発見させる。2006年度アカデミー賞外国語映画賞受賞作品。

http://www.tsotsi-movie.com/index.shtml

- 日 時：8月2日 (土)  
14:00~15:40  
(開場13:30)
- 場 所：あーさ 355 2階 プラザホール
- 入場料：一般/800円、  
前売り/高校生以下600円、会員400円  
※前売券は、あーさ 355 窓口のみで販売。電話予約は受付けません。
- 問合せ：国際協力課 (担当：ふくしま)  
TEL：045-896-2964 (祝日除く月曜休み)

8月17日 (日)

8月あーすシアター上映会

## 「アボン 小さい家」

(制作：(特活) サルボン&ルボン・バギオ (比NPO))

フィリピンの日系3世であるラモットは、3人の子どもを抱えバギオで乗り合いバスの運転手をしている。だが、生活費を稼ぐため妻イザベルは海外へ働きに行くことになり、子どもたちは実家のある山奥の村に預けられる。電気も通っていない村に子どもたちは最初戸惑うが、自然に祈り自然と共に生きる生活に次第に慣れていく。そんな時、イザベルが偽造パスポートの容疑で逮捕されたという連絡が…。

- 日時：8月17日 (日)  
①11:00~13:20 ②15:00~17:20  
※作品上映時間111分  
※今泉光司監督による上映前解説  
※上映終了後に質疑応答の時間あり
- 場所：あーさ 355 5階 映像ホール
- 定員：先着130名 ※事前申込不要
- 参加費：無料
- 問合せ：情報サービス課 (担当：うたしろ)  
TEL：045-896-2896 (祝日除く月曜休み)  
FAX：045-896-2299  
E-mail：kikaku@k-i-a.or.jp

# かながわエスニックレストランマップ2008

財団では、県民の皆様に、「食」と「暮らし」を切り口として神奈川に暮らす外国人の文化や歴史的背景に対する理解を深めていただくための小冊子『かながわエスニックレストランマップ』を発行していますが、この度2008年度版が完成しました。この小冊子は、財団が提携する県内約30店舗のエスニックレストランの紹介と、提携店で受けられる会員の皆様向けのサービスを掲載しています。また、今年がブラジル日本移民100周年であることから、提携店の中で南米料理のレストランを経営するオーナーの方を訪ね、日系移民の歴史等についてお話を伺いました。身近な生活者としての日系人の声をお聞きいただき、多文化共生社会について関心を寄せていただければ幸いです。



## ■問合せ先

総務課（担当：みずの）  
TEL：045-896-2626 E-mail：kanri@k-i-a.or.jp

## 映像ライブラリーリニューアルオープン!

7月1日より、あーすぶらざ2階の映像ライブラリー視聴コーナーの全ブースで、DVDとVHSビデオが見られるようになり、より一層利用しやすくなります。スタッフ一同お待ちしておりますので、ぜひご来館ください。

所蔵映像資料：1,851本（VHS1,676本、DVD175本） 所蔵図書資料：31,167冊  
利用時間：9:00～17:00（受付16:45まで） 休館日：祝日除く月曜、年末年始



●**かながわ国際交流財団**（略称「KIFJ」）は・・・  
地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人のつながりを大切にした国際交流・国際協力、地球市民意識の高揚と多文化共生社会の実現、国際的な人材の育成、学術・文化交流並びに世界に向けた情報発信などの様々な事業を展開しています。

●**KIFサポーターになりませんか？**  
財団の活動を支援して下さるKIFサポーター（賛助会員）会員を募集しています。会員になると・・・  
・財団が主催する各種催しを掲載した情報誌をお送りします。  
・当財団の出版物の割引サービスが受けられます。  
・会員の方を対象にした催しへ招待します。  
・会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。

\*会員登録をご希望の方は、財団までお問い合わせ下さい。振り込み用紙など関係資料をお送りします。

★当財団は、2006年4月より、神奈川県から指定管理者の指定を受け、**あーすぶらざ**を運営しています。  
★このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。



JR根岸線「本郷台」駅改札出て左すぐ



バスで越しの場合  
JR横須賀線「逗子」駅前1番乗り場より、16または26系統「湘南国際村」行きバスに乗り、「湘南国際村センター前」下車。所要時間約25分 料金340円

## 読者のみなさまの投稿募集!

読者のみなさまからの投稿コーナーを始めました。

- 自分がしている国際協力・国際交流の活動について
- ボランティア活動をしていて日ごろ感じていること
- 会員の方は、「会員になったわけ」 etc.

一方的に発信するだけでなく、読者のみなさまからも情報誌についての意見や感想をいただきたいと思っています。双方向に語り合う場として、紙面を活用していきたいと考えています。ぜひみなさまの「声」をお寄せください。

【投稿先】原稿をメールかFAX、郵送でお送りください。  
FAX：045-896-2945 E-mail：minsai@k-i-a.or.jp  
〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-2-1 かながわ国際交流財団 情報誌編集係

## かながわ国際交流財団ニュースレター

2008年7月1日発行 第8号  
発行/財団法人かながわ国際交流財団  
〒247-0007  
横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 あーすぶらざ2F  
TEL：045-896-2626（代表）  
FAX：045-896-2945  
URL：http://www.k-i-a.or.jp  
E-mail：minsai@k-i-a.or.jp  
印刷・DTP/有限会社 青史堂印刷

## 広告を掲載しませんか？

各ページに広告を掲載するスペースを設けています。県内で国際協力・国際交流の活動を展開している市民活動グループをはじめ、図書館、公民館、パスポートセンター、県立高校、市町村国際担当部署、市町村教育委員会、市町村区役所、県庁、会員などに配布しています。発行部数は6,000部です。どうぞお気軽にお問い合わせください。

## 編集後記

無感覚でいることの罪  
デパートやオフィスビルに行くと、ビルの警備員さんや掃除のスタッフなど、たくさん働いている人たちがいる。でも、時々その存在を風景の一つとして見てしまっていることがある。その人たちは自分と同じように働き、同じように生活をしているはずなのに、その事実と切り離してしまう。「汚してもきれいにしてくれる」と無感覚になっている自分がいた。(も)